

第22回スポーツ・ボランティア・リレートーク レポート

2013年5月9日（木） 19時より21時

中央市民センター 創作室

参加者 18名

「全国のスポーツボランティアの現状と課題～全国調査結果を踏まえて」

講師 仙台大学 体育学部 体育学科 助教 柴田 恵里香 氏



【はじめに】

こんばんは、仙台大学の講師をしている柴田と申します。昨年の12月の全国スポーツマネジメント学会では、皆様にお手伝いいただきありがとうございました。おかげさまで仙台らしい運営ができ、また、一階ロビーに展示した仙台のスポーツに関するパネルなどは、今後に向けてのいい財産になったと思います。私は大学に勤めて3年めで、一般の方に話すのは初めてですので少し緊張しています。できれば最後にディスカッションもできればと考えていますのでよろしくお願いします。

まずは私自身の紹介をさせていただきます。生まれは大阪で今は標準語で話していますが、大阪弁で話すのはかんたんです。幼少期は父親の仕事の関係で、プエルトリコで5年ほどすごし、その後大阪、アメリカ、メキシコ、東京で過ごしました。大学を卒業してから一般企業で5年ほど勤め、その後、自分に何ができるかを考え、大学院でスポーツマネジメントを学び、縁あって3年前から仙台大学で勤めることになりました。

プエルトリコはスポーツが盛んな国で、また、美人が多い国としても有名です。アメリカは私がスポーツマネジメントに関わるようになったきっかけとなった所で、住んだところはインディアナ州という大変スポーツに力をいれている地域でした。みなさんもモータースポーツのインディ500はご存じでしょうし、他にもバスケットボール、アメリカンフットボールなどあらゆるスポーツがありました。また、私自身は水泳をやっていたのですが、スポーツでいい成績をあげると学校で賞賛されるという経験をしました。当時は、自分が恵まれた環境にいるとは思いませんでしたが、スポーツを支える力の強い地域でし

た。

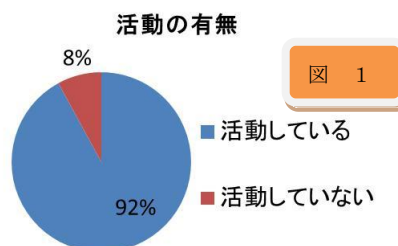
次にメキシコではメキシコシティに住みましたが、住みながら高地トレーニングが自然とできてしまう所でした。スポーツ選手が良く高地で合宿しトレーニングを積みますが、その効果を実感しました。また、さまざまな遺跡があり、プロレスやサッカーも盛んな国でした。

スポーツの体験ということでは、水泳とアルティメットをしています。特にフライングディスクを使用するアルティメットという競技では、競技を通じて仲間が作れ、チームを作る楽しみを知りました。現在の研究分野は「スポーツマネジメント」で、今も教師をやりながら早稲田大学で学んでいます。スポーツツーリズムにも興味があり、今年の仙台国際ハーフマラソンでも調査を実施します。

【スポーツボランティア全国調査からの報告】

最初に、スポーツボランティアに関する全国調査を実施したいきさつですが、2012年12月に仙台で、日本スポーツマネジメント学会が開催されることがきっかけでした。全国でも特にスポーツボランティアが組織化された仙台から、スポーツボランティアに関する情報を発信していこうということで、その資料とすべく9月から10月にかけて、全国のサッカーや野球を含む128のスポーツ団体に郵送で調査を実施しました。その結果、約半数の63団体から回答を得たものです。

最初に、活動の有無についての質問では、回答した92%の団体でスポーツボランティアが活動しているという回答結果でした。(図1)



次に、その運営形態についての質問(図2)では

全体の80%がチームや施設が直接運営しているという回答でしたが、続くチームや施設内に専任スタッフがいるかという質問では「いる」と回答したのは36.2%であり、最も多かったのは他の業務と「兼務」していると回答した62.1%でした。

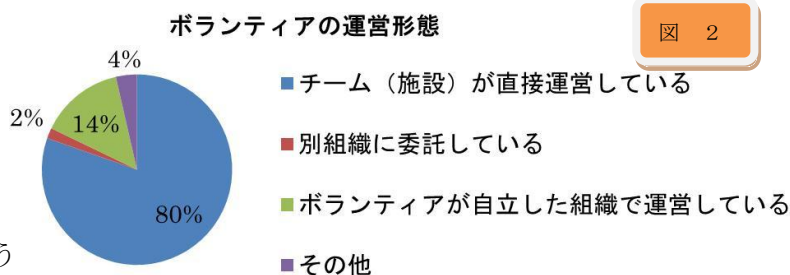


図 3

平均年齢:	(笹川スポーツ財団の「スポーツライフデータ2010」より)
40歳(15.8%)	⇒ 12.0%
30歳(14.0%)	⇒ 10.1%
50歳(8.8%)	⇒ 7.2%
男女比:	
(男性)50:50(女性)	⇒ 27.3%
60:40	⇒ 18.2%
70:30	⇒ 12.7%

参加しているボランティアについての質問（図3）で、年代別ではトップが40歳代の15.8%、次に30歳代の14%、50代の8.8%であり、これは笹川スポーツ財団が2010年に発表しているスポーツライフデータとも一致しています。一般的に30歳代、40歳代は仕事で忙しいと思っていましたが、現実にはかなり活発に活動しているようです。

男女比では最も多いのはほぼ半分という回答でしたが、全体では男性が多いようです。登録数の平均は112名でしたが、5名から1,400名というところまで非常に大きな相違がありました。登録数は多ければいいというものではありませんが、登録人数の変動についての質問では、減少しているという回答が43.1%と最も多かったことは気になります。（図4）

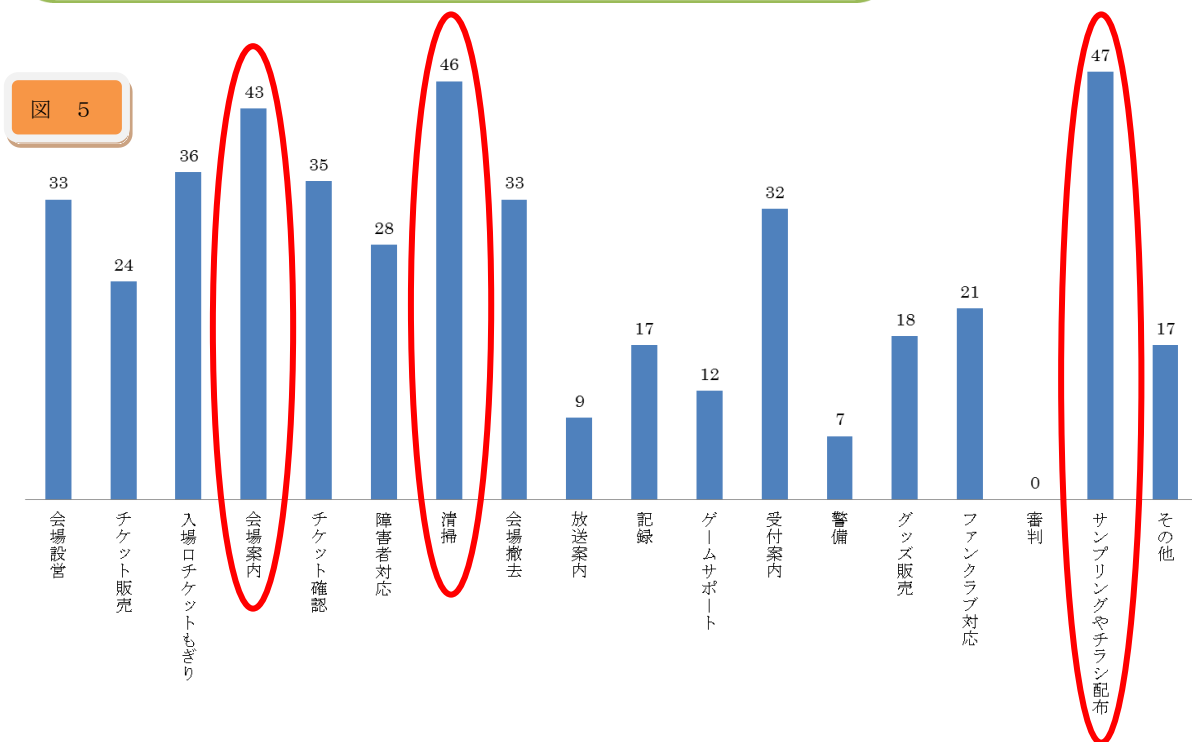
登録人数:
 平均112名
 (50名、100名との回答が10%)

登録人数の変動:
 増加↑・・・31.0%
 横ばい→・・・25.9%
減少↓・・・43.1%

※ 最少が5人
 最大が1400人

※ 継続率
 90%が20.4%
 80%が18.5%
 50%が13.0%

図 4

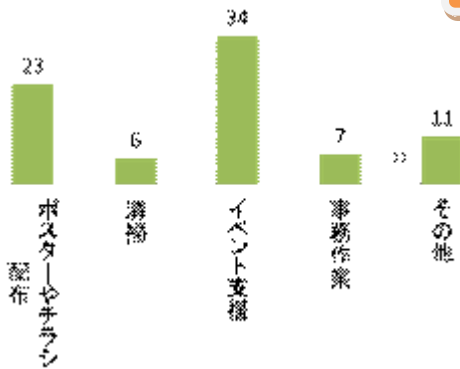


ボランティアの活動内容では、トップはサンプリングやチラシ配付で、次いで清掃、会場案内となっていて、審判や放送など専門性の高い活動は少なくなっていました。（図5）
 ゲーム日以外の活動内容では、イベントの支援やポスターやチラシの配布が多く、先ほ

どのスポーツライフデータでの、「実施を希望するスポーツボランティア活動」という

ゲーム日以外の活動内容

図 6



実施希望内容
(スポーツライフデータより)

地域のスポーツイベントの
運営や世話 (48.7%)

日常的な団体・クラブの
運営や世話 (32.5%)

日常的なスポーツの指導
(25.2%)

全国・国際的なスポーツイ
ベントの運営や世話
(12.7%)

配布作業やイベントが中心となっている

質問に対する一過性の全国・国際的なスポーツイベントよりも、「地域や日常的な活動に関心が高い」という傾向とマッチしていました。(図6)

続いて運営方法で、「ボランティア研修」の有無についての質問では、「ない」(56.9%)が「ある」(43.1%)を上回り、今後の課題として考えられます。一方で「ボランティア説明会」の有無への質問では、大半のチームや施設で実施されており、活動のためのマニュアルも用意しているところが多数を占めました。次に「ボランティアのリーダー制度」の有無についての質問では、「ある」(53.4%)が「ない」(46.6%)を上回りましたが、では、「リーダー研修」がありますか、という質問では、「ない」(79.6%)が、「ある」(20.4%)を大きく上回りました。今後のために、人を育てるという視点からみれば、ここにも課題はあると思います。

ボランティア募集の告知方法については、ホームページとロコミという回答が多く、この方法では、潜在的なニーズには

届きづらいと思われます。

年代別などターゲットを決めてしっかり働きかける取り組みが必要だと感じました。(図7)

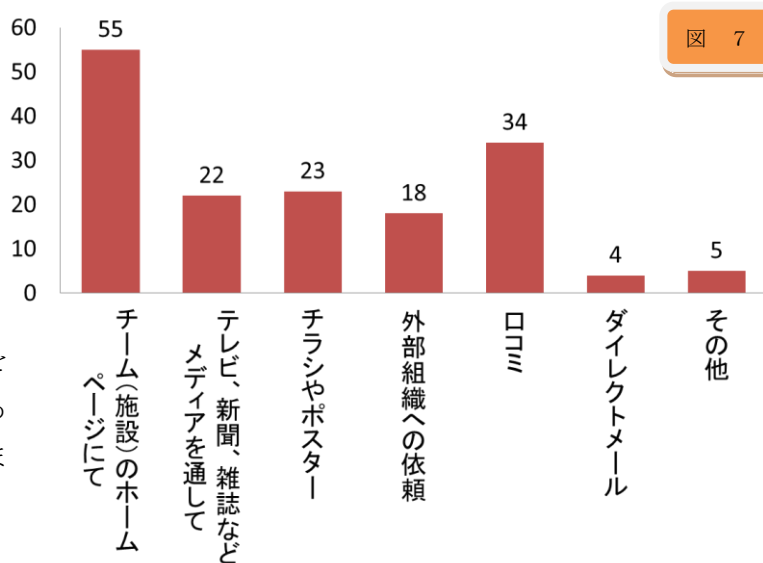
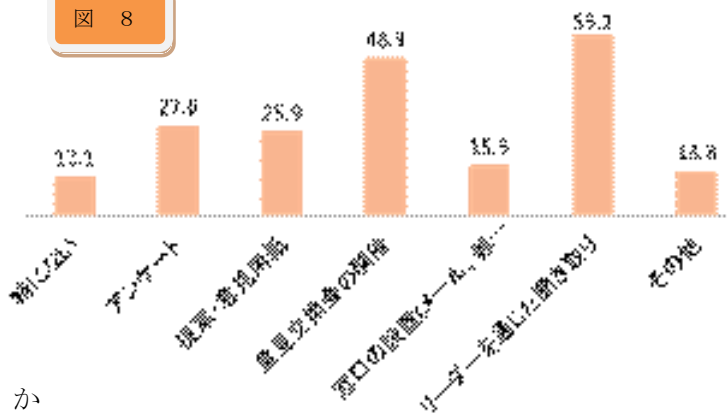


図 7

図 8



チームとボランティアとのコミュニケーション方法への質問では、「リーダーを通じた聞き取り」「意見交換会の実施」が大半でした。なかなか専任のスタッフが置けないという状況では、さまざまな間口を多数用意する必要があるのではない

と思います。(図8)

コミュニケーション作りのひとつともなる「ボランティア同士の交流会」があるか、という質問では、「ある」(75.4%)が「ない」(24.6%)を上回りましたが、「他地域や他チームのボランティアとの交流」については、「ない」(52.7%)と「ある」(47.3%)はほぼ半分でした。ボランティア活動に対する特典については、「弁当や飲み物」「ユニフォームの貸与」のほか、「懇親会・感謝の集い」を開催しているところが多くなっています。

自由筆記で聞いた「ボランティア活動における課題」については、「新規登録者が少ない」「定着しない」など「人数の確保」に関するものが一番多く、次に「高齢化」、「担当業務の振り分け」について、さらにチームやボランティア同士の「コミュニケーション」を挙げた団体が多くありました。

「ボランティア活動に期待する事」という質問では、「楽しんでやりがいを持って参加してほしい」とし、「活動を口コミで広めてほしい」「自立した組織運営やリーダーを置くなどの組織化」「自主的な活動の展開」「担当業務の拡大」「継続的な参加」「個々のスキルアップ」などの回答があり、何かしらステップアップができるような、道筋があればよいのではないかと感じさせられました。

【見えてくる傾向や課題について】

こうしたアンケート調査を通じて見えてくるのは、「運営側の事情」として、専任スタッフや部署が不足していることがあります。この結果、必要とはしながらもスポーツボランティアを受け入れることができないという団体もありました。また、専任スタッフがいなことは、ノウハウの蓄積ができない、問題への対応が遅れる、組織全体の状況を把握した上でのボランティアの適材適所の配置が困難ということにもつながると思います。

「ボランティア参加者側の事情」では、ひとりひとりの違いへの対応という課題があります。スキルの違い、参加する動機の違い、活動の中で変化する優先順位や価値観に対してどう対応していくのかが今後の課題となりそうです。

「情報管理の重要性」というものもあります。運営側が必要とする人数やスキルを整理し、参加者の情報と照らし合わせてどう適材適所で配置するか。そのためには、定期的な情報の収集や積極的にコミュニケーションを図ることが大事だと思います。

いい仲間づくりのフォローも大切です。プロモーションを通じてとにかくボランティアという存在に気づいてもらうこと、そして、こうして参加してくれたボランティアが継続的に飽きることなく活動してくれるように、モチベーションを高める「モチベーションマネジメント」が大事になります。

スポーツマネジメントという視点では、限られた資源でいかに効率よく効果的に組織のビジョンや目標を達成できるか、がポイントとなります。そのためには組織のビジョンをはっきりさせ、それを運営組織とボランティアと一緒に共有する取り組みを「研修会や説明会」で繰り返し行う事が大事です。より具体的には、

- ボランティアの位置づけを明確にする
- 中長期の目標を明確にする
- 限られた資源をどこに投入するかの整理
- 評価と改善方法を描く
- ノウハウやツールの蓄積を行う

などへの取組が必要だと思います。

ボランティア参加者に注目すると、どのような動機をもっているのか、どのようなライフスタイル（何に価値を見出すか）か、どのようなスキルをもっているかなどをアンケートなどで把握することが大切になります。

図 9

スポーツボランティアを	なでしこ観戦者	一般大学生	体育系大学生
知っている	82.1%	25.5%	33.8%
知らない	17.9%	74.5%	66.3%
やってみたい	46.1%	71.3%	78.8%
やりたくない	53.9%	28.7%	21.3%

最後に、補足的情報として、大学生や観戦者に簡単なアンケートを行った結果をご紹介します。質問は2つで、「スポーツボランティアという存在をご存知ですか」という認知度に関する質問と、「今後そのような活動を行ってみたいですか」という興味関心について尋ねました。

スポーツボランティアの認知度（図9）をみると、若い層で認知不足が目立ちました。逆に、潜在的な参加への意欲はあり、しっかりと活動内容を告知していくことで、今後の参加への可能性は高まると考えられます。一方で、常にボランティアを身近でみているスポーツ観戦者（なでしこ観戦者）は、存在は知っているがボランティアはやりたくない、という回答で今後その理由について注目していく必要があるかもしれません。理想としては、活動を認知している人々にとっても、魅力的に映る活動であることだと考えられます。

これからですが、やはり「仲間を増やす」ことが最も大切だと思います。そのためにはまずさまざまなプロモーションミックスの考え方で、活動や存在を知ってもらう事、そして定着のため、その活動に合わせたモチベーションアップのためのインセンティブを工夫することだと思います。ご清聴ありがとうございました。



(文責 泉田 和雄)

